
思い付き、気まぐれ作品集

カナリヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い付き、気まぐれ作品集

【Nコード】

N1129V

【作者名】

カナリヤ

【あらすじ】

ここはカナリヤの思い付きや気分を変える為に書いた短編？の置き場所です。これを作る前に書いた「闇の帝王もどきな俺」「球磨川 乙史」「IS A C f a風のタンク乗り」の3点もここに載せておきます。基本思い付きで書くんが続かないのが普通です。作品が増えることにキーワードが増えるのと統一性が無いのは御愛嬌で

……

妖怪の箱庭（前書き）

思い付きの4作目

ここに当て嵌まるキーワードは妖怪

妖怪の箱庭

どうも〱初めまして、大妖おおやしです。名前が普通はそう読まないだろうとか言わないでください。結構気に言ってるんですよ？名前の由来は特にないんですけど。別に大妖怪という訳でも、妖怪の頭領たるぬらりひょんって訳でもありません。種族は妖怪ってだけと、前世が大矢おおやって名前だったから、妖あやしを組み合わせて大妖でおおやしと読むようにしたんですよ、ノリと勢いで。

「おい、そんなとこで何をしてる大妖」

白髪でそれなりに歳のいつてるオッサンが話しかけてきましたよ〱家族なんですけどね。あと、ここは山の中です。

「何って対陰陽術師の罠だけど？即死級の」

趣味の一つですよ？インディー ヨーイズを見るのが好きだったので、他の人に掛かって貰える罠を自分の箱庭に仕掛けて、人が掛かるのを見るのが趣味であって、罠を仕掛けるのは趣味ではありませんから。

「…………この前互いに不可侵略の条約を結んだのではなかったのか？」

「結んだよ？それでも、入ってくる馬鹿はいるからさ…………そんな馬鹿には罠に掛かって精々笑わせて貰うんだよ。でも、中には潜り抜ける猛者や幸運な奴も居るだろうから、そんな時は頼むからね、血桜ちんくわう」

血桜はオッサンの名前ね。ちなみに血桜は刀の悪い方（人間にと

つては)の九十九神なんだよね……早い話が人間に対して禍を齎す^{わざをいたす}んだよね。具体的に言うと、持てば人を斬りたくなって辻斬り(通り魔)になって、相対すればかなり高い確率で斬り殺される。完全に妖怪として独立しているから妖刀として使われる事はほとんど無いんだけど、人間嫌いだから平気で人を斬り殺すんだよね。

「他の奴にも言っておけよ、言わずとも皆協力してくれるだろうかな」

「それって、鎖錠に口上乙に銀蛇の事？」

「どうして戦闘に不向きな者の名を出す……」

鎖錠は戦えるよ？人間相手じゃ傷付けるような事しないだろうけどね。

ちなみに鎖錠も九十九神で鎖が妖怪化したモノで、口上乙は噂の妖怪で噂を広めたり集めたりするのが得意な妖怪で、銀蛇は金運を招く地味だけど凄いい妖怪だ。戦闘要員は別にいるんだよね。

「普通は朱牢鬼^{しゆらうき}に波鱗丸^{はりんまる}にこないだの新入りの名を出すだろ」

朱牢鬼は名前でわかるだろうけど鬼、それも典型的なね。波鱗丸は天狗だけど、別に顔は赤くないし、立派な鼻は無いから翼の生えた人間みたいなんだけど。

「血桜、名前で呼ばなきゃ駄目だよ。彼女はもう家族なんだから」

「本人が否定しているだろうが……そうだとっても、手放さないだろう？」

「当たり前だろ？今迄手放したのは要らなくなったモノと消えてく
命ぐらいだしね」

ここは自分で作った箱庭だ。ここに入れたモノは手放すなんてす
るつもりは無い。予定調和なんだろうが、ここで生きて行つてここ
で死ぬそれで十分な一生だろう。そう言っつてずっと生きている訳な
んだけど…………

「それに、彼女には行く場所も帰る場所も無いんだから、ここが終
着点でも良いだろ？」

幸か不幸かなんて関係無い。ただ入れたいと思ったから、この箱
庭で受け入れるだけ。

「我が儘だな……………」

「今更だね…………ここに居る奴の大半は我が儘で居るだろ。尤も、居
心地が良いと解ればむこうからお願ひしてくるさ、ここ居さしてく
ださいって。出て行く理由が無ければ、ここはとても良い所だから
ね」

妖怪にとっては人間が増えすぎて生きにくくなつてきている世の
中だ。ただどこかは妖怪でも生きて行けるし、自然もある数少ない
そのままの状態だ。人の手が入らず、決して入らせない箱庭だ。
のんびり生きて行ければそれで十分だよね？妖怪だってさ…………

設定

大妖

いわゆる転生者で、自分について解っているのは妖怪であるという事と、自分が強い事だけ。

容姿は黒髪で肌も日本人らしい肌色で外見年齢は15歳位。顔はつり目で常に閉じているかのように見える。自分が所有する山（土地の権利所は契約の元で人間が持っている）を箱庭と呼び、そこで暮らしている。

マイペースで平穩を好み、誰かが畏に掛かっているのを見るのが好きである。孤独を嫌い、なにかしらしてない時は誰かをすぐ近くに居ようとする。男

血桜

刀の九十九神で、刀の時は妖刀として何人もの人の手を渡りつつ、人を斬ってきた。人の血と怨念を吸い続けて妖怪化したので人間には友好的では無い。性格は常に冷静沈着で冷酷。

容姿は白髪で肌は平均よりやや白く外見年齢は50歳位。顔には老人と言えるようなしわが多数あるが、体の方は現役のスポーツマンみたいにしっかりと鍛えられた筋肉が目立つ。

基本的に主人である大妖を第一にし、武士のような忠誠心をみせるが、武士道などは持つておらず敵を斬る際には正々堂々とは言えない事を平気でする。男

鎖錠

鎖の九十九神で、鎖の時は人間に大切使われてきたので人間には友好的。

口数が非常に少なく、口で言うより行動でよく示す。体のほとんどが鎖なので動かたばにジャラジャラと音を立てるが、やろうと思えば音を立てずに動けるが、面倒なので夜以外はしない。

容姿は常にすっぽりと大きな黒い布を被っているので、それしか見えない。男

口上乙

噂の妖怪。在りもしないモノの噂やそれに対する人間の恐怖心などから生まれた妖怪。

生まれ故に噂を集めたり、広げたりするのが得意で、広まっている噂の妖怪などに化けれたりする。

口がよく回り、噂などの話をすぐに聞けるような仲に誰とでもなれる。

定まった容姿は無いが、基本的には時代に合った美人の容姿になる。
女

銀蛇

土地神兼蛇の妖怪。金運限定だが、それを招く事ができる。その力で土地神として崇められるようになった。

容姿は大蛇であるが、鱗は銀色で目は紅くてどこか気品を漂わせている。人の姿に化ける事もでき、人の時は20代位の美女になり、髪は銀で肌は白である。女

朱牢鬼

鬼。鬼のイメージそのまんまで、豪胆で酒好きで情に弱い。約束などをしっかり守り、律義であるが、私生活では大雑把なところが目立つ。

波鱗丸

天狗の青年。この中では一番若く、一番燃えやすい。若い為に、
くパシリにされたりするが、全ては強くなる為と思って日夜よく走
ったりしている。

妖怪の箱庭（後書き）

出てくる妖怪の種族名のぬらりひょんと九十九神と鬼と天狗以外はオリジナル。銀蛇はぬらりひょんの孫で出てきたのを見て思い付いたんですけどね。

闇の帝王もどきな俺（前書き）

思い付き作品の一作目

内容は5月28日に投稿したのと変わってないんで見た事ある人は飛ばして構いません。

この作品のキーワードはヴォルデモートと魔法先生ネギま！
ネギま！の方は世界だけで原作キャラが出てきませんけど

街に行ったらバケモノ扱いなう。

うん、悲しいかな。こんな見た目では人間と思われないよな。蛇人間と言われた方がしっくりくるもんな。

「我々正義の魔法使いが、貴様のようなバケモノを逃がす訳がなからう！」

なにあれ。自称正義の魔法使い？人を見た目だけで判断しやがって……

許さん！！

「エクスぺリアームス」

しかし、武装解除しか使わない俺はへたれだ……
迷惑料として貴様等の杖は頂くがな！！

小悪党みたいだな、闇の帝王の体なのに……
なんかさつきから足を進めるたびに屈辱感が半端無い
体が逃げずに戦えて、言ってるみたいだな……勝てるだろうけど。
人を簡単に傷つけるなんて、できないんだよ。

だけどそんな思いなんて無駄だって言うように

「死ねえ！！」

殺される。そう感じたら

「アバダ・ケダブラ」

咄嗟に口に出した呪文は、死の呪文で……

緑の閃光は吸い込まれるように、呪文を唱えていた奴の胸に命中した。

糸の切れたマリオネットのように、いきなり崩れ落ちる。

殺しちゃったよ……傷つけないとか考えていたくせに、あさり殺したよ。自分の手で。

だというのに。人としての大罪を犯したのに。込み上げてくる感情は……優越感

自分は崩れ落ちた奴とは違う。そんな優越感が心を満たし始める。気持ち悪い……

体が闇の帝王になっただけなのに、もう　　はもう居なくて、

俺は闇の帝王に近い存在になってしまったようだ。

「俺様が大人しく去ってやろうというのに……貴様らが追いかけてくるから、つい（・・）殺してしまったではないか……」

残っているのは心だけ、だったら心も闇の帝王になれば楽になれる。
　　が消えて残るはヴォルデモートのみ。

「全員死んでも、かまわんだろ？」

未知への恐怖が追いかけて来た奴らに、広がっているのが手に取るように解る。

開心術の一片か。基本的な能力か。どちらかは解らない。

そんな事はどうでもいい……

ただ……

「なに、痛みは無い。楽に逝くだけだ」

こいつらには、俺がヴォルデモートになる肥やしになってもらう。

「アバダ・ケダブラ」

呪文の数だけ死体があることになった。

気持ち悪い……………

十数人殺したが、結局俺は俺で、闇の帝王たるヴォルデモートには成れないらしい。

ああ、楽になれると思ったけど。

やっぱり気持ち悪い……………

球磨川 乙史（前書き）

思い付き作品2作目

内容は6月 18日に投稿したのと変わってないんで見た事ある人は飛ばして構いません。

この作品のキーワードはめだかボックス

球磨川 乙史

やあ、はじめましてになるよね？僕は球磨川 楔の双子の兄の乙史^{とし}だよ。

唐突？こつちに語りかけるな？意味不明？そんな事を気にしてたら、創作物なんて楽しめないよ？

物語りなんて勝手に始まって勝手に終わるモノだからね。

そんな訳で短いだろうけど、ゆっくり楽しんで行くといいよ。

僕の物語り……と言うより、めだかの物語りだろうけど……僕も弟も生まれ持った弱者で、敗者で、過負荷^{マイナス}だから主人公なんてガラじゃ無い。

完全無欠に近いめだかの方が何億倍も……マイナスじゃあプラスでいくらかけてもプラスにならないっけね。

始まる前に僕の話聞いてくれるかい？

聞いてくれるね。友達だもんね！当然だよな！

まずは主人公体質のめだかと、どこで会ったか話をしようか。

アレとは病院で会ったね、会ったと言っても、僕は何にもしなかったけど……

だけど弟は一目惚れしたみたいでさ、意味がありそうな無意味な事を言っただけで、病院は異常無しって判断されて行くだけ無駄な結果だったけど。いや、新しい友達ができたから無駄ではなかったかな？

その子の名前は人吉 善吉^{ノーマル}だったって普通な男の子だったね。

それからちよくちよく、遊ぶようになったんだけどね。あのめだか

も一緒つてのが気に入らなかったけど。

敵対していながら一緒に遊ぶ。思えば、これが中学のあの時まで続いたんだよね……そう、あの日まで。

始まりはそう、阿久根くんがめだかを壊せなくて、改心させられた事件だ。尤も、特別の阿久根くんが異常で完璧なめだかを壊すなんて最初から無理ゲーだったんだろうけど。

そんな事があったから、当時阿久根くんの上にいた僕の弟の楔にめだかが殴り込みに行った訳だ。最悪のタイミングでね。

ちようどその時に、弟が女の子の顔を剥がした後だったんだよね。そんな訳で、弟はボコボコにされたあげくに、守りもしない約束をしたわけだ。

弟がそんなになったから、一緒の中学に居ずらくなっただから転校したんだよ。それから1度も会ってないね、善吉くんにも阿久根くんと、めだかにも。

時間は流れて高校2年生になりました。

驚いた事に、僕が通ってる箱庭学園にめだかが来るんだと知ったから、学園長に頼んで表の名簿から名前を削ってもらったんだよ。

会いたくなかったし、生徒会長になりそうな気がしたからね。実際になりやがったシネ。

先手を打った御蔭で、知られずに済んだから良しとしておこうか。会長になってから好き放題にしてたね。普通に人の身で校舎を動かしたりとか、やっぱり友達になれそうにない完璧で異常な存在だね。

そうそう、もうすぐ弟の楔がこの箱庭学園に来るんだって、楽しみだね！きつと気に入るよ、僕の友達達^{マイナス}をね。

『久しぶりだね、兄さん』

「ん？いつから括弧付けるようになったんだい楔？」

『んゝそうだね。中二位かな』

「なるほど、中二病か。ジャンプ好きなら仕方が無いかな？」

『そうだね！理事長に挨拶したいから悪いけど理事長室に案内してくれない？』『兄さん』

「その前に、寄りたい場所があるけど良いかい？」

『別にそれほど急ぐわけでも無いからいいよ！』

別にもう隠れる必要も、隠す必要が無いから、2人でみんなに会ってもいいよね？

「ははは、やっぱり楔は弱くて強いな」

『今回は、兄さんが居たからあまりやられずに済んだよ』 『ありがとうね!』

なんか知らないけど、戦ってた連中を2人で擦子伏せて。どいつもこいつも擦子を体に擦じ込まれている。

ん？

「ねえ、その君。もし良かったら友達にならないか？握手してさ」

『んん?』 『いつたい誰に話掛けてるの?』 『もしかして、幽霊?』

「残念だけど、嫌われちゃったみたいだね。今回は諦めるよ。でも、次はこの手を取って握手してほしいね」

残念、残念。また1人新しい友達ができるかと思ったのに。でも、旧友に会えるね。今すぐに……

奥のエレベーターからめだか達がぞろぞろと出てくる。

うん、うん。来た、来た。

「なんだ……これは……」

その疑問に答えるように楔がしゃべりだす。
今日の夕飯どうしよっかな

「実際はどうなのだ、乙史よ」

「ん？ああ、ごめん、話聞いてなかった。正直、友達でもないような奴の声って聞く気になれないんだよ。前から変わってないだろ？めだか」

「ッ！貴様！！」

「で？何の話をしてたの？善吉くんに阿久根くん」

「これを、誰がやったかです」

「ああ、そんな事。喧嘩してたから、仲良く両成敗をしたんだよ、仲間意識ができて仲良くなれるかもね。もしなったら教えてね、僕も友達になりに行くからさ」

そう言ってその場を後にする。

球磨川 乙史^{おとし}

球磨川 楔の双子の兄 自称 友達作りの天災
身長は楔より高く、ガッチリとした体形で喧嘩などには結構強い。
二卵双生児のため、あまり似ていない
マイナス
過負荷

悪友 (バットフレンド)

大抵の人物と対等な友達になる。ただし、相手がマイナスでない限り相手がマイナスまで堕ちる事になる。効果は一時的だが、個人差あるものの十分な時間を共に過ごす事によって相手をマイナスにまで完全に堕とすことができる。

IS ACf a風のタンク乗り（前書き）

思い付き作品の三作目

内容は7月13日に投稿したのと変わってないんで見た事ある人は飛ばして構いません。

この作品のキーワードはISとアーマードコア

IS ACf a 風のタンク乗り

「ハッハ————！！！！！！まだまだ行けるぜ
！！！！セシリア————！！」

「ええい！見た目通り堅牢ですわね！」

決闘。それは1対1で戦うことだが、この戦いは決闘と言うのは些か派手すぎる。

ISの試合は名目上はスポーツではあるが、今現在行われている試合は硝煙のにおいが漂う戦場と化している。主に片方の所為で……フルスキンの下半身タンク型ISという、ISの常識を完全無視した構成と、明らかに実戦で使いこまれたような兵器である武装で思いつき暴れているのだ。

現在は背中にはガトリングを2つ背負っており、それで対戦相手であるセシリア・オルコットに弾幕を張ってかたを付けようとしているが、離れている為に命中率は褒められたものではない。それに比べてセシリアの方は命中率は狙撃型の銃を使っているから、かなり高い。しかし、普通では在りえないタンク型ISはそんな攻撃はどこ吹く風と言わんばかりにセシリアの攻撃を受けてもビクともしていない。

「撃ち合いでは負けんよ。あたるのであればな……」

腕が別の武装に変化し、腕自体が武器の兵装になる。

「またですよ!!」

試合中に武器を変えることはよくあるが、腕自体を変える事はま

ず無い。だが、タンク型ISはそれを何度も行っており、そのつどに戦い方を微妙に変化させている。そして今回の武装はグレネードであった。どこぞの社長よろしく面制圧用の装備である。ガトリングの使用を片方だけにして、今度は当たり易いように接近しつつガトリングとグレネード連射をする。基本は正面からの制圧、これは譲れないタンクであった。

もちろんセシリアが接近を許すはずも、グレネードにあたるようなヘマはしない。元々遠距離型なのだからその辺りは心得ている。それでも、予想外の事は起こるのだが……

ドーン……！！

撃ちだされたグレネードとガトリングの弾が接触し、セシリアとタンクの間には爆風と煙をまき散らす。ソレによってセシリアに致命的な隙が出来る。尤も、それを確認する前に果敢（無謀とも言う）にも煙に突っ込むのを気にせずに、セシリアとの距離を最短で縮めべく、タンクだけに積まれているオーバードブーストを起動させる。元来出せ無いようなスピードを無理矢理出すので扱いが難しいが、直進するだけな猿でもできる。誤算があったとすれば、本当に最短距離を進んでいて、IS同士が衝突した事だろう。

「あ………やはり、弱者は信用できんな……」

一瞬止まったが、決闘はまだ終わってなかった。なので、タンクはぶつかった衝撃で体制を整えられてないセシリアに容赦の無いガトリングとグレネードの洗礼を浴びせた。

「なんという事を……」

どこぞの世界最強がそんなこと言ってたが、聞こえるはずも無く、

セシリアのISブルーティアーズは直すより作った方が早いと言われるくらいに破壊された。

御坂妹に憑依したので一方さんを殺そうとしてみた（前書き）

これに当て嵌まるキーワードはある科学の超電磁砲

御坂妹に憑依したので一方さんを殺そうとしてみた

Side ? 07777

憑依した。突然すぎてなにが何だが解らないだろうけど、憑依した。んでもって、わし？俺？僕？私？あたし？は死ぬ運命らしい。生きてれば何時かは死ぬけど、殺されなければならぬらしい。ふざけんな！って思ったけれど、すでに確定運命だとさ。訳が解らない……。死ぬのは嫌だ。前世^{まえ}なんて憶えて無いけど、確かにあったという記憶しかないけど、そこでは命はそんなに軽くなかったはずだ。

だから、抵抗することにした。だけど、出来る事はほとんどない。ミサカネットワークとかいうのがあって、自分はそれに組み込まれているから他のシスターには居場所とか筒抜けにできたりするらしい。コレのせいで逃げる事は不可能。自由もほとんどないので、元より不可能だったんだけど。

と言うか、自分が居る場所は研究所？ミサカネットワークで聞いたら、自分はクローンで超能力が使える。カミナリパンチ、人間スタンガン、放電、とかができた時は憑依して良かったとか本気で思ってしまった……。嬉しくなってピョンピョン跳ねたり、同じ研究所にいるシスターに抱きついたりしたのは黒歴史だ。しかも、実験室でやってしまったから研究用の資料として一部始終を録画されていた……。シネ、腐れ研究者共…………

その後で知った事なのだが、本当は自分は感情が無いらしい。そのせいで？07777「バグナンバー」とか研究所内では呼ばれている。それに、自分は能力の電撃がレベルで表すと4相当で高いらしい。希少価値がある「生存ができるかと思っただけれど、感情があるから失敗作もどきみたいに見られている。

《さようならと、ミサカはミサカお別れの挨拶をします》

そんな情報が伝えられて、自分の前の番号が消えるのを理解する。

「うううっ！クソっ！」

仲が良いとかそんなんでは無かったけど、同じ研究所にいて一番初めに顔を合わせたシスターだった。彼女にやった事は、悪戯としてあまり変えようの髪形を変えた位だったけど、それでも、他とは違うと思っていた存在だ。よく解らないけど、氣遣われている感じがしていた。戦う前に、ちょっとした悪知恵を授けたりしたけど、無駄に終わって殺されてしまった。

次は自分の番。そんな恐怖より、殺された怒りが強かった。元々、自分が戦う時には研究者を説得した御蔭で今までとは違う状態で一方通行に挑める。研究者達はそれでも私が殺されると思ってクセラレタいうだが、殺されるつもりなんてない。逆に殺してやるつもりだ。

「殺してやる！一方通行ああああ！！」

時間なんて、すぐに過ぎてしまう。今の自分にはそれはむしろ都合だった。時間が過ぎすぎると、怒りより恐怖が勝ってしまうであろうから。準備はできるだけしてきた。

「今夜のターゲットはてめえで合ってたなア？」

「今夜のターゲットは、自分だけとミサカは答えます」

細身で白い男。いかにもひ弱そうな見た目だが、目の前の男が一方通行であるのは間違いない。情報通りだし、一般人はまず紛れ込まないはずだ。

「しかし、敵は自分だけではありません。今回の実験は、リーダー・ハンティング。多くの敵がいる状況でリーダーだけを殺すのが今回の実験。殺し方は自由ですが、殺していいのは自分だけというのを忘れないで下さい。それと、リーダーとその他の識別を容易にする為に、自分は他のミサカとは違う服装と髪形になっています。

定時まで、5、4、3、2、1、0」

0と言った瞬間に、隠れていたシスター達が5方向から消火用の放水機を使って一方通行に水をぶつける。それと同時に自分は一方通行から離れる。普通であれば、何もできずに水に打たれ続ける。暴徒鎮圧などにも使える方法であり、相手を殺傷なんてはしない。打撲や骨折はありえるけど……

しかし、水は一方通行には届いていない。一方通行が示す通りの能力であるベクトル（力の向き）変換の超能力によって、水は届く前に反対方向に行くようにベクトル変換されている。それが基本だというのだから、驚くしかない。銃などを使えば、撃った弾がそのまま戻って来るのだから、下手すればそれでお死まいになる。だ

が、放水では中らないだけだ。常に同じだけ放水していれば、相殺するだけで終わるし、反射されて中つてもそこまでダメージはない。それに、放水している間は一方通行は視界不良になる。

「ちったあ頭を使うじゃねエか？」

笑っていやがる。能力の発動にどれほどの演算力を使っているかは知らないが、まだまだ余裕があると声音で解る。

《A～E班、計画通りに放電を開始》

《了解と、ミサ力達は返事をします》

一班5人編成で作っており、放水機を使うのは2人で事足りるので、一班につき3人と自分で踝まで濡れそうな程に溜まっている水に向かって放電する。

コンクリートで舗装されている学園都市の地面は、水の逃げ道さえ塞いでしまえば容易に水を溜める事ができる。他にも、予め一方通行の周りにだけ水が集まる様にしたり、自分達には触れないようにしてあったりするのだが。

放電をぶつけられた水は電気分解をされて、水素と酸素に分離する。ただの水を電気分解するのは非常に効率が悪いが、今放電しているのはレベル3相当15人に、レベル4相当が1人居るのでなんとかなる。

《退避》

《了解と、ミサ力達は返事をします》

気体はすぐに飛散してしまう。だから、退避指示と共に手榴弾の

ピンを抜いて一方通行に向けて投げ、すぐに自分も退避する。投げ
てからキツチリ三秒後に手榴弾は爆発した。酸素と水素と一緒に。

酸素は物が燃えるのを助ける特性があり、水素は火に反応して爆
発する特性がある。微量であれば、ただ音がするだけだが、大量に
酸素と共に発生させて爆発させたので、普通だったら黒ずみか、人
の形を保って無い。昔だったら水素爆弾なんてあつたくらいだから、
対人としての威力は十分であつただろう。

「ちったア、面白くなってきたじゃねエか！」

「チツ！」

しかし、目標は健在。ベクトル変換なんてされてしまったら、ど
の様な攻撃でも無効化されてしまう。解つてはいたが、ここまで絶
対的な壁は空恐ろしい。だが、絶対的であつて絶対ではない。そも
そも、この実験は絶対能力者を生み出すための実験だ。

付け入る隙はある。あんな絶対的でも、人間だ。不完全で脆い人
間だ。反射の壁さえ越えられれば殺せる。その壁が高い上に分厚く
感じるのだが。

《これよりプランBに移行。AとE班は指定位置に移動。FとJ班
までは射撃準備を》

《了解と、ミサカ達は返事をします》

「リーダーは逃げると、一方通行にミサカは宣告します」

ここら一帯はは実験の為に少し前から閉鎖されている。その御蔭
で、畏を幾つか用意できた。どれも幼稚で単純な畏だが、無能力者
なら簡単に殺せる畏ばかりだ。自分はその畏を避けながら進むが、

一方通行は罠に掛かるのを気にせずに普通に歩いてくる。

鉄骨が幾つも降ってきたのに、それを殴るような動作と共に自分の上から退かず。弾薬庫のようにカートリッジや弾薬がある場所に誘い込み、入った瞬間に電撃で某発電大佐のように全ての弾薬に点火したが、全て反射されてしまった。ピアノ線もあっさりと切られてしまった。

《FJ班射撃を開始》

《了解と、ミサ力達は返事をします》

続けて一斉掃射も試してみたが、これも無駄であった。時限式のグレネードランチャーを使って、全て一方通行の手前で爆発するようにしたのに無駄だった。

《射撃中止、指定位置に移動を開始。これよりプランCに移行》

《了解と、ミサ力達は返事をします》

「なんだア？これで終いか？」

グレネードランチャーによる掃射ですらも涼しい顔で凌ぎきったバケモノが目の前に立っている。

「いえ、まだ終わってはいません」

また手榴弾を投げつける。

一方通行はそんな物は恐ろしくないのだろう。これまでと同じように気にせずに自分に近づく為に歩くが、その慢心を利用させてもらう。手榴弾が炸裂する前に目と耳を塞いで背を向ける。一方通行

は疑問に思っただろうが、無意味だ。自分が投げた手榴弾は破片と爆風の代わりに、閃光と甲高い音を撒き散らす。そう、投げたのは相手を殺傷目的の手榴弾ではなく、相手を行動不能するのを目的とした閃光手榴弾だ。音や光も反射できるかもしれないが、普段からは全ては反射してはいないはずだ。現に一方通行は音が聞こえているようであつたし、しっかりと見えた。完全に反射されていたのなら、音は聞こえないだろうし、物が見えるのは光が物に当たって反射した光を目で取り込んでいるからだ。だから、少なくとも一定量の光と音は届くはず。

無力化ができたか、それを確認する為に振り向いた瞬間に、拳が脇腹に減り込んだ。

「ガアッ!？」

「着眼点良かったがア、それだけだったなア」

一方通行は、光で目を潰されもせず、音で鼓膜がやられもしていなかった。どうやら、一定以上は反射されるようになっていたか、察知されたのであろう。

脇腹が凄く痛い。おそらくベクトル変換で無駄に威力を上げたのだろう。

「まあ、今迄で一番頭をつかってたんじゃねえのか？オマエ」

頭を掴まれそうになったが、電気信号を作り出して無理矢理身体を動かす。少々不格好な動き方だったが、それはどうでも良い。必要なのはポイントまでの誘導。そのまま走って逃げる。だが、追い抜かれた。低空飛行みたいに足元を凄い勢いで飛んで行った。

「まだ何かあるみてエだが、そろそろ殺されろ」

「一方通行、超電磁砲レベルガンを知っていますか？」

「ああん？てめえのオリジナルの事か？それとも、兵器の事か？」

「両方です。オリジナルと比較すると、レベル3相当で1%未満です。なら、100体以上で同じ事をすれば、数値上ではオリジナルと並べるはず。そして、自分達は数を揃えるのは簡単です」

そう言うってから、左側を指差す。つられて一方通行はその方向を見る。その視線の先には、電気を帯びて光っているモノが見えたであろう。

《充電率150%。いつでも発射できると、ミサカ達は報告します》

《ファイヤ
発射！》

逃げる。余波で肉片になる破壊力をもっているのに巻き込まれるのはゴメンであるし、自殺の為に計画したのではない。

協力兵器 超電磁砲。自分達を発電機やバッテリーのように考えて撃ち出す。原理はそのまま、砲身は鉄骨を利用し、弾丸は鉄塊だ。180人のシスターの協力で撃ち出すそれは、オリジナル越える破壊力を生み出す計算になっている。問題点は、一回しか撃てない。一発で砲身に使った鉄骨はダメになるし、撃ったシスターは電池切れになってしまう。

そんな虎の子の一撃を、一方通行は簡単にベクトル変換で上に飛ばした。反射ではリーダー以外を殺してしまうから、飛ばしても安全なのは空だけからの判断だろう。でも、切り札をあっさりとは無効化されたのは精神的にくるモノがあった。

「今のは、驚いたがあ。あれじゃあ不足だ」

ゆっくりと、一方通行が近付いてくる。そして、自分に触れた。

「そんじゃ、これではあ！？」

喋る為に口を開いたところに、ピンを抜いた手榴弾を突っ込む。

「待っていた。無警戒で、ここまで近付くこの瞬間を……死ネ」

血流を逆流させられる前にはなれる。自分の口に何を突っ込まれたのかを目だけを動かして確認し、驚愕に目をカッ！と見開く。無意味で、無駄。もう終わる。手榴弾が一方通行の頭を消し飛ばす。

はず、だった。手榴弾は爆発した。けれども、破片と爆風は一方通行の口から吐き出すように出て行った。

「体内でも、ベクトル操作が可能……？」

終わったのは、自分の方だった。

御坂妹に憑依したので一方さんを殺そうとしてみた（後書き）

電波が来ました。

綺礼さんになりました(前書き)

ここに当て嵌まるキーワードはF a t e

綺礼さんになりました

ぐるぐる

「君のその右手に顕れた模様は『令呪』と呼ばれる。聖杯に選ばれた証、サーヴァントを統べるべくして与えられた聖痕だ」

父親とその友人がなぜか私の周りを回っている。正直に言って、コレは避けたかった。

聖杯戦争は正直めんどくさい。しかも危ないじゃん。第5次なら使う余地もあるが、第4次ではまともに使えるキャスターのサーヴァントが召喚されないから戦うだけ無駄である。

そうと解つていれば聖杯に選ばれないと思っていた。だが、選ばれた。『聖杯』か『この世全ての悪』は余程に私が嫌いか、好きなのだろう。まあ、願望が無い訳ではないのだが……

「さて、何か他に質問はあるのかね？」

「ひとつだけ。なぜ私の周りを回ったのですか……？」

「……」

「……」

やっちまった。いくら前世から疑問だからって聞いちゃいけないことだったか……。

おい、なんで目を合わせて迷ってるんだよ。アレか？聖杯の御告げ（笑）か？それとも直感でそうしないといけないと思ったのか？それか『うつかり』か？

「私は一旦イギリスへ寄って行く。『時計塔』の方に少々、用事があるからね。君は一足先に日本に向かってくれ。家の者には伝えておく」

無かったことにするな、ヒゲワイン。

「承知しました。では、早速にでも」

断るなんてできる筈もない。面倒だが大人しく従うか……

綺礼さんになりましたのプロット

主人公は綺礼に転生（憑依？）し、感性などは綺礼そのままだが、考え方は少しお気楽な感じになっている。ハッキリ言うと言と善悪などどうでもよく、せいぜい図太く生きていこうなど考えている。

妻の死にはかなりのショックを受け、その反動で子煩悩全開の父親になっている。

5次には介入してカレンの被虐霊媒体質をキャスターに聖杯で無くさせようと画策していて、4次には璃正の手伝いをするかもしれないだけ思っていた。が、令呪が刻まれたので仕方なく第4次聖杯戦争に参戦した。

聖杯戦争の途中で、時臣が勝つと危険だと思いだして（アンリマユが現界するかもしれない）知識通りのタイミングでギルガメッシュを確保（第五次聖杯戦争で生け贄にするつもり）知識が役に立たなくなるのを避ける為に　　ついでに、愉しむ為に苦しめながら

時臣を殺害した。当然、璃正も見殺しにした。

最終決戦では場所は冬木市民会館にしたが、聖杯を勝ち取るつもりはまったく無く、切嗣が聖杯の泥を被るようにした。目的を達成したら、自分は安全圏に逃げ出した。

泥が自分に影響を及ぼさないようする為に、令呪を使ってギルガメッシュが泥に飲み込まれるているであろう時間はパスは切った。そうやって自分だけは泥は回避して、なお且つギルガメッシュを肉させる。

十年後。子ギルと仲良くなったのが悩みの種になったが、とりあえず時間をかけた計画を開始する。ランサー、及びにキャスターを確保。バゼットはランサーへの魔力の供給源として確保。

もしもバゼットと共闘するなら、バゼットルートに突入。

ランサーは令呪で鞍替えの賛同だけさせといて後は遊ばしておき、キャスターは柳桐寺に居させ、アサシンを門番として召喚させる。ギルガメッシュは始めの方はあまり動かない。

ちなみに、ギルガメッシュの魔力供給源は全部教会の地下の生け贄達。キャスターは現界に必要な魔力の分だけ綺礼が供給。

士郎が教会に来てサーヴァントが全員召喚されてから活動開始。HFルートに突入させない為に、間桐桜はランサーの『刺し穿つ死棘の槍』で序盤に間桐臓硯と一緒に殺害。それによってライダー脱落。

次は、小聖杯であるイリヤスフィールを確保する。ギルガメッシュの『王の財宝』でバーサーカーを倒させて、イリヤスフィールを

生きたまま確保。

ギルガメツシュ、ランサー、アサシンを令呪で自害させて、聖杯を降臨させたらノーマルエンド。

ギルガメツシュがセイバーの確保に動くので、ランサーを連れて一緒に衛宮邸を襲撃。

ギルガメツシュ対アーチャー、ランサー対セイバー、綺礼対凜の戦いが起きる。

ギルガメツシュはアーチャーを^{フェイカー}贗作者と蔑むが固有結界を展開された上にエアを使わせまいとするアーチャーの戦術で押されていたが、途中で撤退。

ランサーはセイバーを殺せないように令呪で強制させられていたので全力を出せずに敗北しそうになったところで撤退。

綺礼は殺し合うつもりが毛頭なく、戦況が悪くなったところで他の2人を令呪で撤退させた。

もしも撤退しなければ、ギルガメツシュルートに突入。

アーチャーの助言によって士郎は凜とパスを繋げたり、セイバーに鞘を返したりしてから教会に攻め込む。待ち構えていた綺礼、ギルガメツシュ、ランサー、キャスターと戦闘になる。ちなみに、アサシンは既に自害させられている。

アーチャー対ランサー、ギルガメツシュ対セイバー、キャスター対凜、綺礼対士郎の戦いが起きる。

アーチャーはランサーの『突き穿つ死翔の槍』を『熾^{ロー・ア}天覆う七つの円環』で殆ど防いだ後に、防ぎきれなかったのが自分に当たるのを無視して『偽・螺旋剣^{カラドボルグ?}』でランサーを射抜いて辛くも勝利を収める。

ギルガメツシュは割と本気で『王の財宝』を展開してセイバーを捕らえようとするが、セイバーは早々捕まる筈もなく業を煮やしたギルガメツシュはエアを抜いて『約束された勝利の剣』と撃ち合つて余波で戦闘不能にしようとするが、『全て遠き理想郷』に防がれてしまい、無防備になつたところを斬られる。

白兵戦を警戒して空中砲台となつたキャスターに凜は手も足も出なく、凜は負ける。だけど、アーチャーに助けられて生き残る。

綺礼は自分の起源である「傷を開く」を発現させる専用魔術礼装を使って、一撃で士郎を戦闘不能にして捨て置こうとした。しかし、瀕死の重体であつた士郎は『全て遠き理想郷』を投影して全ての傷を治して綺礼に再度挑みかかる。『干将・莫耶』で接近戦を挑み、なんとか鶴翼三連を決めて綺礼に深手を負わせたが、黒鍵を両腕と両足の関節に刺されて自力で動けなくさせられる。

黒鍵の刃が消えるまでの僅かな時間で、綺礼は令呪を魔力に変えて残っていると動きに支障が出やすい傷をほとんど治して立ちあがり、凜を庇っているアーチャーに黒鍵を投擲して気を逸らせてキャスターにアーチャーを倒させる。

ギルガメツシュは無防備になつたところを斬られたが、運良く致命傷だけは避けていた。油断しているセイバーを捕らえ、なんとか動けるようになった士郎も捕らえる。

一応は、トゥルーエンド

バゼットルート

士郎、凜、慎二はバゼットと交戦して死亡。ギルガメツシュと戦

って良い線までいくが、途中でキャスターと綺礼の乱入でランサーが敗退する。

ギルガメツシュは聖杯でセイバーを現界させようとするが、綺礼に令呪で自害させられる。キャスターも聖杯使用後に用済みとして自害させられる。

綺礼とバゼットが結婚する。

ノーマルエンド

キャスターが受肉して綺礼と結婚する。

聖杯戦争は事実上終結したが、なぜそうなったか判らない士郎、凜、セイバー、アーチャーは調査するが結局解らずじまいで終わる。

ギルガメツシュルート

撤退しないと綺礼を護ろうとキャスターが乱入するが、セイバーに一撃で倒される。キャスターがいないと望みが叶わないので、綺礼は絶望する。

順当に勝ったが、望む形で願い叶えられないので聖杯はギルガメツシュに完全に譲る。残りの生涯をギルガメツシュの友人として過ごす。ちなみに、セイバーはオルタになってギルガメツシュの妻になっている。

綺礼とバゼットが結婚する。

トゥルーエンド

キャスターが受肉して綺礼と結婚し、セイバーはオルタになってギルガメツシュの妻になっている。

残りの生涯をギルガメツシュの友人として過ごす。

士郎と凜は生きてはいるが、魔力の供給源にされている。

全ルート急通

桜、臓硯、イリヤスフィールの死は絶対。

綺礼が結婚しているのは、カレンに母親がいた方が良さそうとして。

綺麗さんになりました（後書き）

騙して悪いが、プロットでな……

もう1つの戦端

ウェイバーは一時的になるかもしれないが、運良くキャスターも戦力に加えられた。魔術面ではキャスターの協力を得られる限りは相当のモノとなった。それでも、優秀な魔術であつてもサーヴァントのほとんどが対魔力持ちなので対サーヴァントではそこまで期待はしていない。

ウェイバーが望んだのは多数の使い魔などで敵勢力の発見と、もしもの際に備えて魔力を貯め込んでおくことだった。敵の拠点さえ判れば攻め込むもよし、挑発などして炙り出すも良い。イスカンドルは座して待つなんてする性格ではないので、そうなると予想していた。

魔力を貯めこませるのは非常用だ。イスカンドルの宝具はウェイバーは2つとも見たことがあるが、『神威の車輪』は真名解放をしたところを見たことが無く、『王の軍勢』は展開させたのがたった数分であるのと、思い返すとうにも持っていかれた魔力が少ない。考えてみれば、イスカンドルが持つていく魔力を調整していてもおかしくはない。少なくとも、イスカンドルが気兼ねなく持つていける魔力量を生成できていなかった筈であり、それは今もたぶん変わらない。ここの一番つて時に魔力不足で敗退するなどウェイバーには我慢ならない。

だから、キャスターに頼んで霊脈から魔力を汲み上げ、果ては健康に影響がでない程度だが霊脈を通じて他人から魔力を採集させている。

無論、等価交換としてウェイバーは対価に魔力の供給量を強いられそうだったが、ウェイバーが魔力の余裕の無いのを聞くと、キャスターはしぶしぶと言った様子で、代わりにウェイバーの精を提供させる事にした。それを提案した時のキャスターは、顔を赤らめていたのだがフードに顔が隠れてウェイバーに見えていなかったのは

余談だろう。

また、毎晩精の提供の過程を襖の向こうで聞くイスカンドルが「性欲を持て余す」など独りで愚痴ったのも余談であろう。

「始まった、か……」

寝室としている部屋で、遠坂凜と間桐慎二を監視しているネズミの使い魔越しにウェイバーは戦いを盗み見る。セイバー、アーチャー、ランサー、アサシンのサーヴァントを確認できたのはかなりの幸運だろう。今一緒にいるイスカンドルとキャスターも合わせて6騎のサーヴァントが確認できた。

セイバーが前回と同じである騎士王というのには多少は驚いたが大した問題ではない。むしろ問題があるとすれば、前回のサーヴァントの生き残りであるキャスターとして召喚されたアーローニアの方である。

アレが未だに現界しているとしたら、聖杯戦争に乱入しない筈が無い。万能の願望機の聖杯をアレは欲しないと前回と言った。だが、アレは前回の聖杯戦争を勝ち残った。アレが望みを叶えたかは知りようもないが、必ず姿を現す。そんな確信が持てた。

しかし、必勝法が思いつかない。『王の軍勢』を使えば本性を曝け出したバケモノの姿になってまた喰われるのが目に見えている。純粋に武を競ってもイスカンドルが負ける。可能性があるとすれば、『神威の車輪』の真名解放で一気に片を付ける。真名解放は見たこととは無いが、おそらく純粋に破壊力を増した疾走になるだろう。手心を一切加えずに、逃げる間も回復させる間も与えずに消滅させる。

勝つならば、そうしなければおそらく不可能。

「おおい、キャスターに確認させたところによると、もう始まっているそうだな」

アーロニーロへの対処を考えているウェイバーの気も知らずに、さつき見た時は寺の坊主達と談笑していたイスカンドルが楽しげに話しかける。何を言いたいかなんてウェイバーも解っている。聖杯戦争が始まったからには、夜に拠点に籠る意味も必要も無い。敵を捜して駆けようと言いたいのだ。

「ああ。早速、戦場を駆けるんだろう？」

「ふふん、解っておるではないか」

嬉しげに、イスカンドルが笑う。聖杯戦争など第一歩に過ぎない。目指す先はもっと遠くにあるのだから……

「拠点から出るっていうの……？」

イスカンドルの後から付いてきたキャスターが不満げに言う。彼女からすれば、イスカンドルとウェイバーの考えに納得できない。ちよつと挑発すれば、自分が陣地作成で設えた工房よりランクの高い神殿が形成されていると知らずに、敵が突っ込んでくる可能性が高いのに、わざわざ神殿から出て敵を探し求めるのかが解らない。しかも、自分も一緒に行かなければならない。コレに関しては判らなくもない。何せキャスターは別に忠誠を誓っている訳ではなく、敵対しないで一緒にいるだけだ。拠点に1人で残していけば、これ幸いと反旗を翻すかもしれない。そんな危険を冒すより一緒に居た方がすぐに対応できるし、監視もできる。それに戦力になるかもし

れないのだ。拠点においていくよりはよっぽど良い。

「では、敵を捜して行くこうとするか」

「凄いわね……空を飛べる宝具。流石はライダーのクラスといったところね」

キャスターの『神威の車輪』に乗った感想がそれだ。流石に3人も乗ると少々御者台も手狭になり、10年前のウェイバーなら身体を捻った状態でなら前を見れたが今は厳しいモノがあった。それでも、ウェイバーからすれば『神威の車輪』のスピードは微塵も損なわれていなかった。

キャスターは空も制する『神威の車輪』に戦慄した。魔術で空が飛べない訳ではないが、ただでさえ効率が悪いのに『神威の車輪』程のスピードを出そうというのなら更に魔力消費が激しくなる。

敵対しない方が正解。キャスターは純粹にそう思えた。自分の最終手段である空中に逃げて魔術を連発して一方的に攻撃するというのが出来ない。きつと攻められれば、それだけで勝敗が決してしまうと容易に想像できた。

「そうであろう。何せこの戦車は手に入ればマケドニアを征服できると予言された品。今の世の戦車にも見劣りせんわ」

予言など信じずに、「運命とは伝説によってもたらされるものではなく、自らの剣によって切り拓くものである」と言ったとも伝え

られているが、褒められているのは自分ではなく戦車なので有名な話を持つてくる。信頼を寄せる宝具を褒められるのは嬉しいのだ。

「それより、敵の拠点は解っておるのか？」

「始まりの御三家の拠点は既に判っている。アインツベルンは結界のある森の奥に拠点を構えているから確認はできないが、遠坂と間桐はマスターとサーヴァントをもう確認できている」

そこで、ウェイバーは言葉に詰まる。待ち伏せでもしていたのだろうか？ たった今バーサーカーとそのマスターが現れて、3騎のサーヴァントと交戦を開始したのだ。

「……今なら、セイバーを従わせているマスターと一緒にバーサーカーと戦っている」

「ふうむ……では、そこに行こうとするか！そこまで英雄豪傑ども揃っているのを逃す手は無い！」

「ふっ……やっぱり、か……。方向は向こうだ」

まとめて征服するのにまたとない機会。サーヴァントが4騎もいる戦場に、喜び勇んで突撃をかます理由などイスカンドルにはそれだけで十分。そしてウェイバーはそうなると判っていた。だから真っ直ぐと戦場の方向を指差す。

イスカンドルはその方向を目指そうとし、いきなり振り返った。

「どうしたんだ？」

「敵が来おった……」

静かに、一点だけを見つめて何時になく真剣な顔になる。その反応にウェイバーには腑に落ちない。ライダーのサーヴァントの感知範囲はさほど広くない。今は空にいるので他のサーヴァントが感知範囲に入る事はない。実際に前回は殆どが目視でサーヴァントを発見していた。なのに、敵を感知した？ライダー以外にも飛行宝具を持っているサーヴァントでもないなければありえない。

「なにやら、嫌な奴が来たようだな」

ピリピリとした空気を纏って、ライダーは囁く。身体が、本能が、魂が、敵が近付いてきていると警告する。

「なんだ……アレは……」

リュックサックからとりだした望遠鏡でライダーが見つめている先を見た。映ったのは、月光を鈍く反射しながらこちらに向かってくる灰色の物体だった。

もう1つの戦端（後書き）

ライダー「後書き リストラ同盟！」

アサシン「灰色の物体……いったいなんであろうな」

ライダー「Zeroでボツ案になったのを出すらしいようですが……」

アサシン「クックック、灰色の時点で判るとおもうがな。作者の勝手なイメージカラーだが、何度か本編に出ておるしな」

ライダー「まあ、今回は早速の展開となっています。そしてウェイバーはキャスターにフラグを立てています」

アサシン「少し、弱いきもするがのう」

ライダー「ウェイバーは誠実……な方でしょうし、真名を聞こうなどまったくしません。寡黙であつたらドストライクでしたでしょうね。……シャツとパンツだけでテレビゲームをしなければ」

アサシン「そういうシーンは無いであろうがな。流石に他人の家でそのようなラフな格好もできわしまい」

ライダー「ゲームはイスカandalが買つてきそうですが……。3人ならパーティーゲームが妥当でしょうね」

アサシン「あの女狐がやりそうになさそうな気もするが……」

ライダー「ゲーム負けて顔を真っ赤にして「もう一度よ!」と言ったらかわいいでしょうね。そのうち涙目になっていそうですが。…私では合いそうもないですね。

では、今回は此処までにしましょうか」

アサシン「あい判った」

ライダー「それでは、また更新されるまで……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1129v/>

思い付き、気まぐれ作品集

2012年1月13日22時59分発行